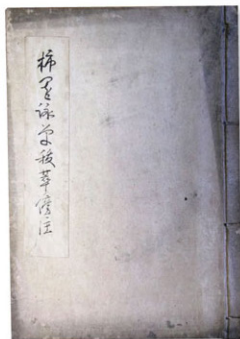
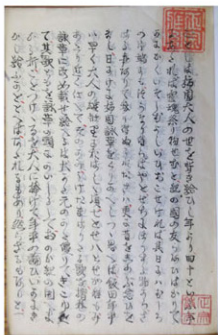


## 『柿園詠草拔萃傍註』



函架番号 911.15-K。写本 1 巻 1 冊。縦 22.9cm × 横 15.8cm。袋綴。墨付 41 丁。1 面 12 行。楮紙。白茶表紙。外題(題簽)に「柿園詠草拔萃傍註」。内題「新貞老著 柿園詠草拔萃傍註」。蔵書印「正宗雅胤」「正宗敦夫」。奥書に「明治三十二年四月八日に小野節ぬしよりかりて写し終る 正宗敦夫しるす」とある。本文に朱点を附す。

本学の特殊文庫の成立に深く関わった正宗敦夫(本学元教授、1881-1958)自筆の写本である。本書は明治三十年六月に刊行されたもので、それを正宗敦夫が写している。この時、満年齢で 17 歳。その早熟が窺える。

『柿園詠草』は加納諸平(1806-1857)の歌集で、この人物は『類題鮎玉集』の編纂などによって、幕末期の歌壇に大きな影響を与えた。『柿園詠草拔萃傍註』は、その門下の一人である新貞老(1827-

1899)による同書の抜萃の注釈書である。貞老は鳥取藩士、柿園派の歌人でもあり、同派最後の人物の一人。この『柿園詠草拔萃傍註』は鳥取市上魚街二十一番地で印刷・発行された。

奥書によれば、正宗敦夫は小野節(1864-1917)から本を借り受け、それを書写している。備中船穂村の豪商の子であった節は歌人、正宗敦夫とも深い仲であり、遺された書簡にそのことが窺える(吉崎志保子著『正宗敦夫の世界』)。

この頃、終焉を迎えつつあった柿園派歌人の書に、正宗敦夫が興味を持ったのも氣に掛かるが、これは若さ故の濫読の結果として見た方がいいか。青年期の正宗敦夫の息づかいを感じるこのできる興味深い資料である。2015 年、本学の所蔵となった。

(文学部日本語日本文学科 准教授 原 豊二)